

*KangriGarupo 2009*



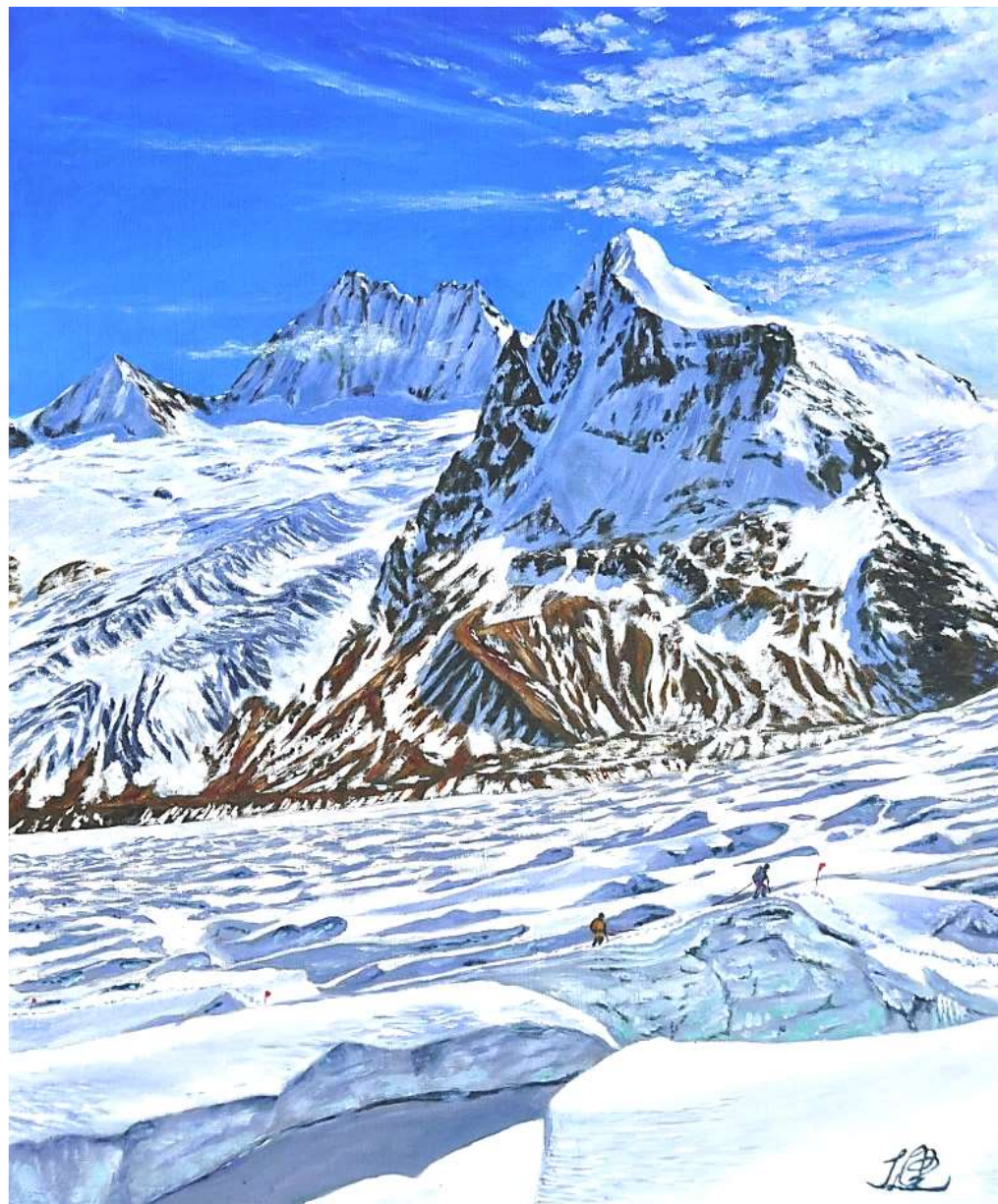
pic. 7 ラグー氷河 M 10号 2010

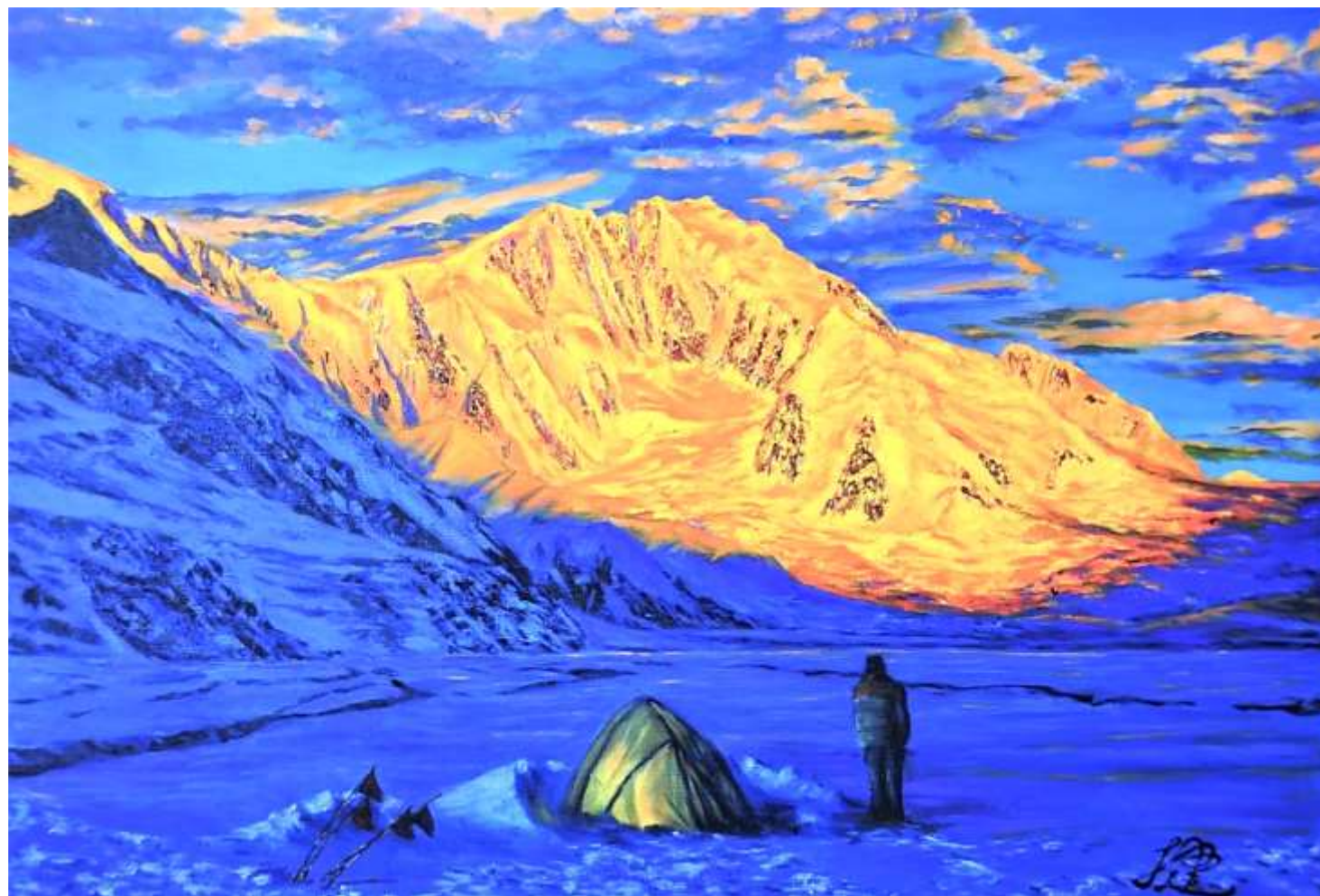
ラサを出発して3日目にラグーの集落に到着した。2007年の偵察以来2年振りの集落は小学校や集会所が新しくできていたが、そこから見えるラグー氷河の雄大な流れは少しも変わらない。ゴンヤダ、ゼー、ハモコンガ、そして30km奥の氷河源頭のゲムソングなどの峰々が超然として聳えている。

pic. 8 アイスフォールに行く

F 20号 2010

デポキャンプからアドヴァンストベースキャンプ（ABC）へ荷揚げを行う。標高 4500m付近にあるアイスフォールに入ると、まるで荒れ狂う大海原に行くような錯覚を覚える。背後にはシャナ峰が遙か高みから我々を見守っている。





pic. 9 アタ氷河の夜明け M 20号 2010

アタ氷河 4700m 地点のABC。夜明け、氷河の奥に聳えるKG3の頂上部分に灯がともったように陽が当たると、見ている間にオレンジ色に輝く範囲が山頂からすそ野に広がっていき、それにつれて輝きも増していく。地球が自転していることがわかる雄大な景観である。

*KangriGarupo 2009*



pic. 10 氷河の登高 F 20号 2012

ABCから第一キャンプ（C1）への荷揚げ。先行する2隊員のトレースをひたすらたどる。前方を見るとガスが切れてKG3が驚くほどの高さに巨体を現した。その壮大な氷の芸術品に荷揚げの苦しさを忘れしばし見とれた。

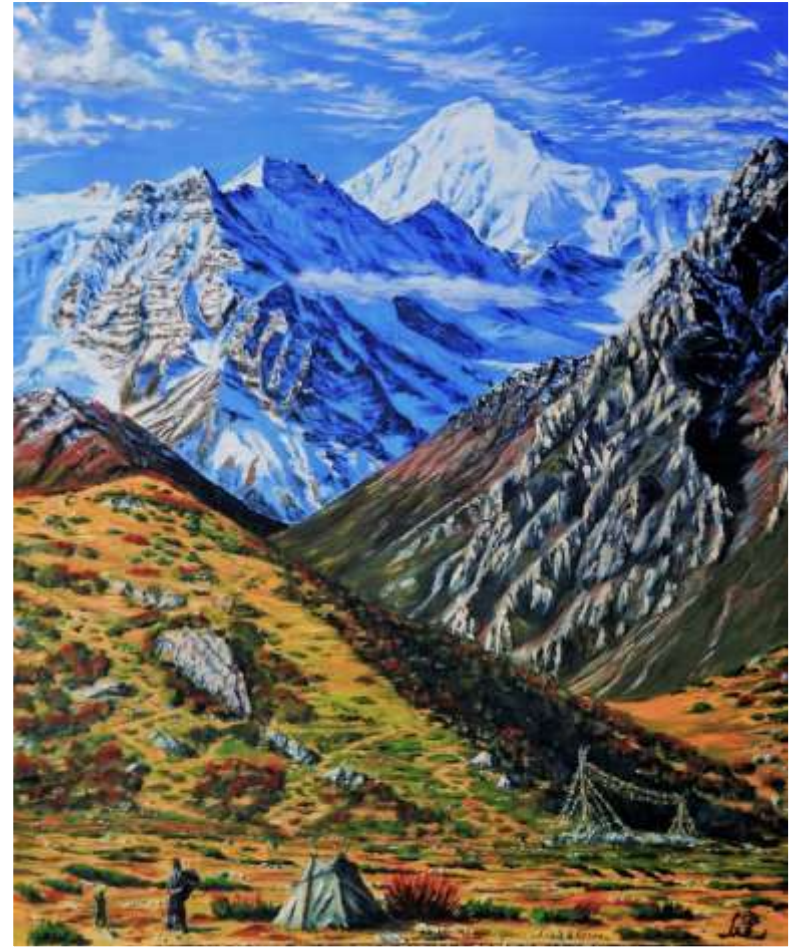
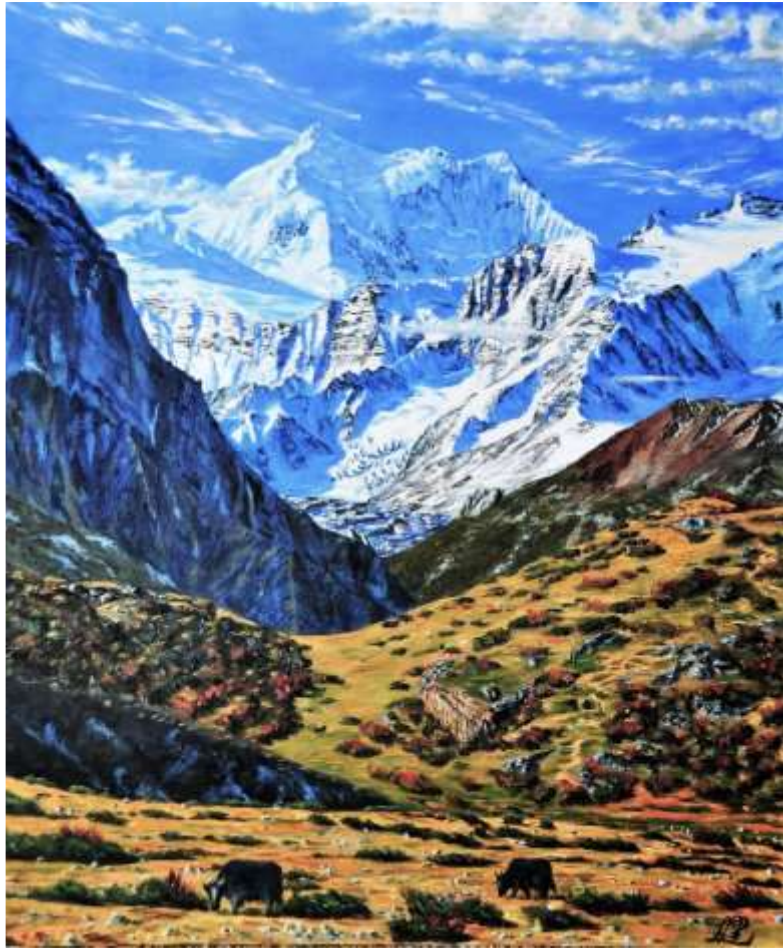


pic. 11 頂上へ向かう朝

F 20号 2019

いよいよ頂上攻撃を始める朝、C1では隊員が出発準備をしている。2km上空のKG2に陽が当たり始め、ヒマラヤ巒が花嫁のベールのように美しく輝く。満月がその右肩に沈もうとしている。

この三日後、ついに悲願の初登頂に成功することになる。



pic.12/13 チベット高原の片隅にて F 20号×2 2011

カンリガルボの山々に別れを告げるためにラウからザユール街道の高原に登り着く。初冬の澄み切った青い空をバックに最高峰ルオニイ（左；KG1）と、つい先日我々が初登頂したロブチン（右；KG2）が迎えてくれる。高原は灌木が紅葉し草原が黄金色に染まる。ここはチベットの東南の片隅。広大なチベット高原はここで尽き、カンリガルボの白い山々の向こう側はインド・アッサムの熱帯ジャングルへと続く。高原とジャングル、あまりにも違う二つの世界を隔てる偉大な山々である。



pic.14 夕照のヒマラヤ P 30号 2012

カンリガルボからラサへの帰り道、日没直前にセチラ峠に登り着いた。ナムチャバルワは東の方角に聳えていた。グレートヒマラヤの東端に君臨する巨大な山。高距3千メートルにおよぶ西壁いっぱいに夕陽を浴びて輝いていた。